

すこ つめ かん はるかぜ あ かのじょ えがお む
 少し冷たく感じるベンチ。春風に当たる彼女の笑顔がこっちに向いた。いくつ
 だま かんざし にっこう あ ひか
 2 かのびい玉がついている「簪」は日光を浴びてまばゆく光った。

すな あつ うしろすがた しず こうえん すなば あそ こも び
 小さな手で砂を集めている彼女の後姿。二人しかいない静かな公園の砂場で遊ぶ木漏れ日に
 たびいっしゅん しろ はなうたま あ
 4 当たる度、一瞬だけ光るかんざし。「お城だよ～」と鼻歌交じりで飽きることなく彼
 うご
 女は手を動かしていた。

ふ つづ あきさめ まどご でんきゅう
 6 降り続く秋雨。ソファの上から彼女は窓越しの公園を見つめる。電球の光を浴
 にぶ
 びたかんざしが鈍く光る。

ふゆ ごご げんかん き あわ あしおと あら いき
 8 冬の午後。玄関から聞こえる彼女の慌てた足音。粗い息をしながら「あのね」
 な ごえ なみだはなみず かお
 と泣き声で言う。涙と鼻水で顔をめちやくちゃにして「あのね、かんざしがね、どこに
 ひっし
 10 もない」と必死になって言おうとしている。

むし ひとふき お
 少し冷たく感じるベンチ。彼女はしゃがんで虫を見ている。春風の一吹を追っ
 と た かみ お きよねん
 12 て虫は飛び立つ。こっちを向く彼女の髪を押さえたかんざしは光を浴びて去年と
 ちが
 また違う色でまばゆく光った。